

石造宝篋印塔の成立と展開

岡本 智子

宝篋印塔とは一般的に、「宝篋印陀羅尼」にその名が由来し、錢弘俣塔を起源として成立した供養塔である、とされている。しかし、それが何を供養するために立てられた塔で、なぜその塔が盛んに造立されるにいたったのか、といった根本的な問題は、宝篋印塔の長い研究史の中でも正面から論ぜられてこなかったように思う。

本稿では、宝篋印塔とはいったい何かを明らかにすることを目的とし、石造宝篋印塔出現期の鎌倉時代を中心として、その成立と拡散の意義を検討した。

具体的には、まず鎌倉時代の石造宝篋印塔を分類し、それぞれのタイプの分布状況と造立年代を検討することによって、石造宝篋印塔の拡散過程の復元を試みた。これによって、石造宝篋印塔はまず京都で成立し、その後、大和、近江において出現期から独自の様式に規制される形で出現することがわかった。そして、それ以外の地域における宝篋印塔は、いずれも上記した三様式のいずれかを基盤として成立していることが明らかとなり、これが畿内三カ国からの波及として捉えられることがわかった。また、その拡散には3つの画期があって、13世紀後半においては畿内三カ国でしか造立されていなかったものが、13世紀末～14世紀初頭にかけて点的な拡散を見せ、鎌倉末期以降はさらなる造立数の増加と地方への拡散が見られた。しかし、鎌倉末期以降はひじょうに大型で洗練された塔が造立されていた前代に対し、急速に小型化と技術的な退化が進行することが明らかとなった。

次に、石造宝篋印塔がこのように急激に拡散していった要因とは何であったか、という点を明らかにするために、宝篋印塔の起源について検討した。石造宝篋印塔の起源については、研究史上、①銭弘俶塔説、②昝塔説、③中国石造宝篋印塔説の三説があった。

①の銭弘俶塔説は、旧妙真寺塔と塔身の迦樓羅形等の特徴が類似しているとして取り上げられてきたものである。銭弘俶塔とは、呉越国王銭弘俶が阿育王の故事に倣い滅罪・鎮魂を目的として八万四千の塔を鑄造し、諸国に頒布したとされる金銅製の小塔である。この塔は日本にももたらされたことが文献史料から知られ、実際にその遺品が現存している。この銭弘俶塔の形状は阿育王寺阿育王塔の形状に近いものであったとされているが、いくつかのバリエーションがあることが先学の研究によって指摘されている⁽¹⁾。日本に伝来している銭弘俶塔で現在確認されているものはすべて銅製の同タイプのものである。

ところで、中国においては、遅くとも12世紀段階には石造物による銭弘俶塔の模倣塔が出現しているのであるが、これらの中には（阿育王塔を模した）銭弘俶塔を忠実に模倣しているものと、それが退化して、新たな意味が付加されたものの二種がある。そして、この中国石造宝篋印塔はいずれも銭弘俶塔のうち鉄製塔（金華万仏塔で出土しているものに近似）の模倣によるものであった。鉄製塔と銅製塔は、相輪の形態や、隅飾を上下2区に分かっている点、各部を斜傾させている点等に顕著な違いがある。そして、この特徴は旧妙真寺塔にもあてはまる。つまり、日本における石造宝篋印塔は、日本に伝来した銅製の銭弘俶塔ではなく、鉄製銭弘俶塔もしくはその模倣によって成立した中国石造宝篋印塔のいずれかの影響を受けて成立したと考えられるのであるが、旧妙真寺塔は阿育王塔の最も重大な特徴である本生図を写していないので、それが退化して失われてしまった塔、すなわち中国石造宝篋印塔の影響によって出現した可能性が最も高いと考えた。

しかし、一方でこの旧妙真寺塔には極めて日本化された部分も存在しており、またそれに続く高山寺塔以下の宝篋印塔は極めて簡略化された形状をなしている。さらに、京都、大和、近江における石造宝篋印塔が、出現期からそれぞれの様式に規制された形で出現している。これらのことを勘案すれば、日本における石造宝篋印塔の成立は何らかの抽象的概念—すなわち「宝篋印陀羅尼」に見える塔形の造形化という過程を経ているのではないかとした。

ところが、石造宝篋印塔成立の要因となった阿育王塔信仰や「宝篋印陀羅尼」は、院政期における「小塔供養」においてすでに出揃っていた。しかし、石造宝篋印塔は平安末期ではなく、鎌倉中期になって初めて出現するのである。この意味を、筆者は石造宝篋印塔のもつ視覚的表徴としての意味、つまり民衆への勧進性という点に求めた。巨大な石造宝篋印塔が造立される場合は、村落の中核となる寺社や、境界と呼ばれる場に相当する。そこに滅罪・鎮魂の表徴である「阿育王塔」を立て、その塔に結縁することの功德を説くことは、ひじょうに有効な勧進の手段であっただろう。鎌倉期における仏教は民衆への布教を対象とした平易化傾向を辿るとされているが、石造宝篋印塔はまさにその流れの中で出現し、拡散し得た塔であった。

一方で、先学の研究において指摘されてきたとおり、鎌倉期における石造物拡散の背景には新興階層の出現という面も看過できない。13世紀後半における新興階層は、「一結衆」、「念仏講衆」という形で銘文中に出現する。地頭の荘園侵略によって財源的危機にたたされた寺院をバックに勧進によって利潤を得ようとする聖と、一種のステイタスシンボルともいえる塔を造立し、滅罪・鎮魂、そして浄土への切符を得ようとする新興階層の相互の欲求は、鎌倉期における石造物の拡散により拍車をかける結果となった。

しかし、これらの石造物は、決して彼ら新興階層のみを救済する目的で造立されたものではなかった。それは、例えば鎌倉期において造立された石造物の多くに納骨穴が穿たれていること、石造物の多くに地獄に落ちたとの説

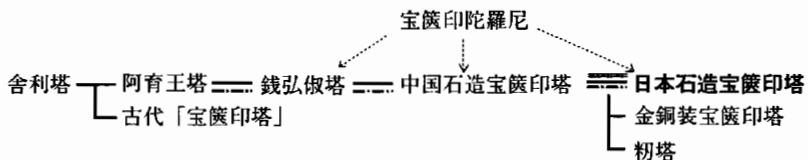
話を持つ歴史上の著名な人物や、「平家物語」の主人公の墓とする伝承が付随していることから見て取れる。このような伝承が付随するのは、石造物と説話両者がもつ、滅罪・鎮魂という性格の一致によるものと思われるが、この両者がセットとなることによって、石造物はそれを造立することのできないさらに下層階級の民衆をも救済することが可能になるのである。以上のように、鎌倉期における石造物は、造塔という行為のみに意味をなすものではなく、その後も機能し続けるものであった。

以上に述べた石造宝篋印塔の成立過程を模式化すると、図1のようになる。

石造宝篋印塔はこのように、舍利塔模倣の連鎖上に成立したものであったが、その中で付加された新たな意味、滅罪・鎮魂を核とする阿育王塔信仰、「宝篋印陀羅尼」に説かれる塔がもつ様々な功德、そして勧進という面を濃厚に兼ね備えて出現した。

石造宝篋印塔はまさに鎌倉期という時代的背景をしてはじめて出現し、拡散し得た塔であったと評価できる。

(1) 吉河 功『石造宝篋印塔の成立』第一書房、2000。



【凡例】

— 舍利信仰、模倣

--- 阿育王塔信仰（滅罪・鎮魂）

— 勧進

←--- 影響

図1 宝篋印塔の成立過程模式図